

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 田ノ口正悟

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之 文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 大串尚代 文学研究科委員、Ph.D.

副査 立教大学文学部文学科英米文学専修准教授 古井義昭 Ph.D.

副査 カリフォルニア大学バークレー校教授 サミュエル・オッター Ph.D.

論文題目 **The Power of Nothingness: Destruction and Reconstruction of American Ideals in Herman Melville's Writings** (虚無の力——ハーマン・メルヴィルの描くアメリカ的理想の破壊と再創造)

本研究は、19世紀アメリカを代表するロマン主義作家ハーマン・メルヴィル(1819-91)が、自ら師と仰ぐナサニエル・ホーソーンのうちに見出した「闇の力」(“the power of blackness”)を痛烈に意識しつつもそれと拮抗する独自の「虚無の力」(“the power of nothingness”)を培い、そこから編み出した独自の的方法論により、デビュー作『タイピー』(1846)から遺作『ビリーバッド』(1923)に及ぶ歩みにおいてアメリカ的理想の批判と再創造を行ったのではないかという仮説のもとに、主要作品を緻密に分析したものである。

主論文各章は以下のように構成されている。

Introduction: Creating Something out of Nothing

Chapter 1: A Dead Author to Be Resurrected: The Ambiguity of American Democracy in *Pierre: or, the Ambiguities*

Chapter 2: A Revolutionary Hero's Transatlantic Crossings: Destruction and Reconstruction of “Americanism” in *Israel Potter: His Fifty Years of Exile*

Chapter 3: The Revolutionary Ideals Manipulated: Re-figuration of the Founding Fathers in *Battle-Pieces and Aspects of War*

Chapter 4: The Curious Gaze on Asian Junks: Melville's Art of Exhibition

Conclusion: Kaleidoscopic Nothingness: Yoji Sakate's *Bartlebies* and the Great East Japan Earthquake

論文の要旨

序章“Creating Something out of Nothing”では、19世紀アメリカを代表するロマン主義作家ハーマン・メルヴィル(1819-91)が『白鯨』(1851)執筆中、論考「ホーソンとその苔」(1850)を発表し、そこで師と仰ぐナサニエル・ホーソン独自の才能を「闇の力」(“the power of blackness”)、すなわちカルヴィニズム的闇に見出した点に着目する。翌年に出版した『白鯨』においてメルヴィルは、こうしたホーソンへの憧れを屈折した形で表現することになるからだ。片脚を白鯨モビー・ディックに食いちぎられたエイハブ船長は、世界をあやつる邪悪の根源と対峙するために白鯨という「仮面」を打破するように船員を鼓舞するが、しかし一方で彼は驚いたことに、仮面の背後には「何もないかもしれない」とも発言するのである。

エイハブの自己矛盾にメルヴィルの厭世観を見ることはたやすい。しかし、この論文の目的は、メルヴィルのニヒリズムへの傾倒を「虚無の力」(“the power of nothingness”)と名付け、その両義的な意義を論じることにある。彼の虚無の美学は、デビュー作『タイピー』(1846)から遺作『ビリーバッド』(1923)にいたるまで、自死や捕囚、変装、自己棄却 (self-annihilation)のような描写を通じて、一貫して見られる。本論文は、「虚無の力」を内包するメルヴィル作品を、アメリカ的理想——具体的には、民主主義的平等、自律的個人、白人的主体性——の批判と再創造として読解することを目的とする。すなわち、メルヴィル作品が描く、安定的な社会的立場やアイデンティティを失う登場人物の嘆きや怒りは、カルヴィニズムや民主主義といったアメリカ社会の根本理念が抱える問題や矛盾を明らかにする一方で、それらを再構築しつつ改めて理想を提示し直すような原動力にもなっていることを、本論文は証明する。

このことを論じる前段階として、序論では1920年代に始まったメルヴィル再評価の機運がいかにか破滅的に見えるメルヴィル作品の結末に創造的可能性を見出していたか、メルヴィルがどのようにして「虚無の力」を構築していったのかをシェイクスピアやトマス・カーライル、ラルフ・ウォルドー・エマソン、そしてD・H・ロレンスらを参照しながら跡付ける。

第1章“A Dead Author to Be Resurrected: The Ambiguity of American Democracy in *Pierre: or, the Ambiguities*”は出版されるやいなや「狂人の妄言」と非難され、作家としての死を宣告された問題作『ピエール』(1852)を扱う。作品内作家ピエールはアメリカの田園にある宏大な荘園サドル・メドウズにおいて、許嫁ルーシーと幸福な生活を送っていたが、やがて異母きょうだいを自称するイザベルとの出会いによって近親相姦の色彩を帯びていく。しかも心血を注いだ作品が「不道德な無心論者」であるヴォルテールらからの剽窃にすぎないと指摘され、人生に失望した彼は、殺人を犯し刑務所に送られて、イザベルとともに命を絶つ。し

かし、ピエールの死が体現する「虚無の力」はある種の両義性を内包しており、それはメルヴィルのアメリカ観を炙り出す。19世紀中葉のアメリカは、建国の父祖を神格化しながら、旧世界からの政治的文化的独立と民主主義的平等の国内外での実現を目指して、愛国主義的運動を展開していたが、奴隷制や西漸運動を通じて、支配者／被支配者の不平等な関係を温存してしまっていたからである。本章はピエールのみならずイザベルの創作行為に着目することで、アメリカ民主主義批判として読まれてきた本作品の新たな側面を考察する。

第2章 “A Revolutionary Hero’s Transatlantic Crossings: Destruction and Reconstruction of “Americanism” in *Israel Potter: Fifty Years of Exile*”は1849年12月18日、メルヴィルがロンドンの書店で買い求めた古地図を元に執筆した第8長編『イスラエル・ポッター』(1855)を分析する。本作は、アメリカ独立革命の嚆矢となるバンカーヒルの戦いに従軍しながらも、戦場で負傷したために敵の捕虜になり、イギリスへと渡り50年近い放浪生活を余儀なくされた兵士の数奇な人生を描く。『白鯨』や『ピエール』の立て続けの失敗によって作家としての評価を大きく下げたメルヴィルだったが、『イスラエル』は比較的高い評価を得た。本作は矢継ぎ早に3回も増刷されるだけでなく、ロンドンでは安価な海賊版まで出版され、好意的書評も多かった。

『イスラエル』の高評価には、アメリカ独立革命直後から19世紀前半にかけて、アメリカ建国にまつわる書物が多く出版された背景が関係している。例えば、ベンジャミン・フランクリンやジョン・ポール・ジョーンズなど建国の英雄に関する物語が世に出た。第二次独立戦争と呼ばれる米英戦争(1812-15)を経てイギリスからの独立の機運が再燃するなか、フランクリンの人生が物語る「依存から独立」へと至った個人の成功譚は、国家的物語として受容された。また、メルヴィルのタネ本になったヘンリー・トランブル著『イスラエル・R・ポッターの生涯と驚くべき冒険』(1824)のような、独立戦争に従軍した一兵卒に焦点を当てた物語も出版された。これらのテキストはイギリスから独立するアメリカの国家的アイデンティティを形成するために、個人の美德を国家的理念の象徴として示したのである。

本章の副題に掲げた「アメリカニズム」(“Americanism”)とは、メルヴィルが作中で用いる言葉である。メルヴィルの語り手は、タイコンデロガ砦の英雄イーサン・アレンの気さくで愛情に溢れた「西部人の気質」を「彼特有のアメリカニズム」、すなわち「真のアメリカ的精神」と称する。当時流行した建国譚と同じく、『イスラエル』も個人の気質から国家を象徴する精神性、すなわち「アメリカニズム」を抽出しようとする。これまで、本作は、メルヴィルによるアメリカ的精神への批判の書として読まれてきたが、本章は、『イスラエル』が、主人公が「虚無と土くれ」の哲学を獲得するまでの放浪過程を描きながら、アメリカ的精神の流動性を示し、アメリカニズムの批判的再構築を志向しているのではないかと捉え直す。

第3章 “The Revolutionary Ideals Manipulated: Re-figuration of the Founding Fathers in *Battle-Pieces and Aspects of War*”では、生前における最後の長編小説『信用詐欺師』(1857)を出版したのち、約10年間におよぶ沈黙を経たメルヴィルが散文作家から詩人へと転身し、ニューヨークのハーパー・アンド・ブラザーズ社から上梓した『戦争詩篇』(1866)に焦点を絞る。同書は72の詩篇、注釈、そして散文による補遺を通じて南北戦争を描く。本作は、戦場において活躍した南北両軍の兵士や将校を描く前半部と、“Verses Inscriptive and Memorial”と題され、戦死した兵たちへの挽歌や碑文、鎮魂歌から成る後半部に分けられる。国家を二分する戦争の直後に出版された『戦争詩篇』は、戦争で勝った北部人に対して、南部人への敵意や憎しみを捨て、キリスト教徒としての寛大な態度を示すよう呼びかける。その上で、北部の勝利は物質的優位と兵士の数によりもたらされたとして、その勝利を相対化する。

1920年代に始まった初期メルヴィル研究は、彼の詩作品をあまり評価せず、30年にわたる

メルヴィルの詩作時期を“the long quietus”と評し、作家が世界に背を向け形而上学的なものに没頭していた期間と見る。しかし昨今では批評の動向も変わり、『戦争詩篇』についても、南北戦争前後のアメリカ社会との状況と関連が強調されるようになった。

本章では、これまであまり注目されてこなかった建国の理念の観点から、『戦争詩篇』を再読する。南北戦争は勃発時から「第二のアメリカ独立戦争」と評されていた。すなわち、南北両軍がみずからの大義を正当化するために、独立宣言や合衆国憲法などに示される国家の根本的理念を流用していたからである。

奴隷制反対の立場をとる北部人であるメルヴィルによって書かれた戦争詩は、南部による建国の理念の悪用を批判する。しかしだからといって、彼の詩は単純に北部の勝利を賞賛しているわけではない。メルヴィルは自由と平等を大義とするはずの北部人が持つ党派的愛国主義が、南部への憎しみを継続させて、南北間のヒエラルキーを生じさせる未来を予見する。とくに彼は、敗北した南部軍総司令官ロバート・E・リーをアメリカ建国の父祖であるジョージ・ワシントンと重ね合わせながら、南部の戦死した兵や壊滅した町の失われた声を代弁し、いわゆる「失われた大義」の本質へ迫る。北部人でありながら南部人のふりをするメルヴィルの虚無の美学からは、党派的愛国主義を回避しようとする彼の姿勢が浮かび上がる。南北戦争を単なる反乱 (rebellion) ではなく「革命」(“revolution”)として描こうとする『戦争詩篇』は、メルヴィルが終生取り組んできた、建国の理念の批判的再継承にほかならない。

第4章 “The Curious Gaze on Asian Junks: Melville’s Art of Exhibition”は、『白鯨』において、捕鯨船ピークオド号を初めて目の当たりにした語り手イシュメールが、その古さと奇妙な構造を読者に説明するために、「旧式のラガー船、巨大な日本の平底船 (“mountainous Japanese junks”)、オランダの小型ガレー船」などの外国船を引き合いに出していることに着目する。その視線は、捕鯨船内の人種的多様性とともに入種的他者への恐怖心をも内包しているからだ。オリエント世界から来たとされるエイハブの腹心の部下、鋸打ちのフェダラーについて、イシュメールはその異形に驚きつつ「難破した日本の平底船」からやってきたようだと人種差別意識を隠さない。

けれども、メルヴィルが描く人種表象は一枚岩ではない。本章では、メルヴィルのアジア表象——とりわけ中国と日本——に注目しながら、白人的主体性を棄却してみせる彼の虚無の美学を検証し、彼が多くの作品で描写していたアジアの平底船のモチーフを重視しつつ、いかにメルヴィルがアメリカ (植民者) とアジア・太平洋地域 (植民地) の帝国主義的二分法を瓦解させようとしていたのかを輪郭づける。

メルヴィルにとって、太平洋はアメリカの「帝国主義的まなざし」を屈折させる空間でもあった。げんに、『白鯨』において、エイハブやスターバックらに乗せたピークオド号は日本近海で白鯨からの攻撃を受け沈没している。つまり、アジア・太平洋地域は、「明白な運命」なるスローガンのもとアメリカの夢が託される空間であると同時に、人種的他者を見て／支配する帝国主義的まなざしを転覆させる空間でもあるのだ。これらの研究を踏まえつつ、本章では、メルヴィルが、いかに当時のアジアへの人種的ステレオタイプをふまえながらも、帝国主義的主体 (観客) と被植民的客体 (展示物) の二項対立を脱構築したかを考察する。

結論 “Kaleidoscopic Nothingness: Yoji Sakate’s *Bartlebies* and the Great East Japan Earthquake” は、彼の虚無の美学が最も端的に描かれている短編小説「バートルビー」が、主人公が繰り返す「そうしたくないのですが」 (“I would prefer not to”) という常套句によって多くの思想家や学者、あるいは芸術家を惹きつけてきたことに注目し、現代日本を代表する劇作家・坂手洋二の「バートルビー」翻案作品を取り上げる。

坂手は2015年6月、慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された第10回国際メルヴィル

会議において行った独白劇を大幅に発展させながら、同年 8 月、自身が主催する燐光群にて『バトルピース』を上演した。そこでは 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を題材に、災害によって命を落とした人々や、それによって“vital feeling”、すなわち生への活力を失ってしまった人々をバトルピース的人間として描出するものである。

坂手は、何をすることも拒むこうした現代のバトルピースたちを活写することにより、暴走する資本主義社会への市民的抵抗を明らかにするとともに、災害をわたしたち自身の問題として考え続けることで、それを未来に託そうとする想像力を展開した。ハーマン・メルヴィルの生誕 200 周年を迎えた 2019 年現在においてもなお、彼が描き出した「虚無の力」は、時代と国境を超えた創造力を触発し続けているのである。

審査の要旨

田ノ口正悟君の博士論文は、*Moby-Dick* 以降のハーマン・メルヴィル作品に現れる“nothingness”の概念を、否定的ならぬ創造的な力として捉え直し、メルヴィルがそれによって 19 世紀中葉において失われてしまった独立革命時の理想を再生しようとしたのではないかという問題意識を持つ独創的な論文である。同種の視点自体は John Bryant (1998) がすでに提示しているものだが、それを起点にメルヴィル作品を包括的に論じるという例はこれまでになく、しかもこの構想は作品個々に対する精緻かつ堅実な読解によって支えられている。以下、審査委員会が 2019 年 9 月 6 日 (火) 午後北館第二会議室にて行った公開口頭試問をもとに、審査所見をつまびらかにする。

本論文の第一章を飾る *Pierre* 論は、主人公の作家ピエールが独立戦争の英雄を祖父にもつことに注目し、祖先が異人種の抑圧によって繁栄を築いた負の遺産を意識する。いまだ実現されていない独立革命時の理想が、来るべき未来に達成されうるとする本章は、死に生を、終わりに始まりを認める点で、メルヴィル作品における“nothingness”の転覆的な力を説得的に例証している。往々にして異人種の血を継ぐかもしれないと推察されている異母きょうだいのイザベルをもうひとりの作家と見立てる視点も新鮮というほかない。また本章においては、deed (権利書) を deed (行為) と読み換える脱構築的読解が光っており、抽象論に終わることなくあくまでテキストを丹念に読もうとする田ノ口氏の姿勢が如実にうかがえる。ただ、これは本論文全体に渡って言えることではあるが、ホーソン以外の同時代作家への言及が極点に少なく、とりわけ女性作家や性差理論については黙殺されているので、そのぶん、ピエールの本来の婚約者ルーシーの役割に関する考察が弱い。論考の発想が独創的な分だけ、もう少し外在的な証拠をも揃えた上で論証すれば、はるかに説得力が増しただろう。

第二章 *Israel Potter* 論は、ヤング・アメリカ運動の愛国主義的機運のなかで、建国の父祖たちに関する物語がよく読まれたという歴史的コンテクストを踏まえたうえで、メルヴィルがその機運に逆らい、フランクリンら建国の父祖たちを批判・脱神話化したことを示す。しかし本章の要点は、イзраエルの家やバンカーヒル記念塔にも苔が生えていることに着目したうえで、革命時の未完の理想が未来において達成される可能性を読み取る。この瞬間、本論の核となる“nothingness”が単なる否定/肯定という二分法に回収されうるものではなく、否定かつ肯定でもある、という重層的な意味を持つ概念として立ち上がってくる。

第三章 *Battle-Pieces* 論は、メルヴィルが本作品において北部人ながら南部人として語っているというアイデンティティのねじれに着目し、本詩集が北部の勝利を寿ぐだけではなく、敗北した南部にも同情的視線を向けていると説く。南軍将軍ロバート・E・リーが建国の父祖ジョージ・ワシントン大統領と重ね合わされていることから、本作品においては建国の理想が南部にも受け継がれており、その達成には、北部と南部の対立を乗り越える必要が暗示さ

れていると田ノ口君は論じる。そして第四章は、メルヴィル作品におけるアジア表象を文化史的なアプローチから検討したうえで、特に短編“The Piazza”に焦点を当て、語り手の植民地主義的な視線が脱構築されていると論じる。これら第三章・四章はそれぞれの各論として興味ぶかい議論を提示しているものの、前述の第一・二章に比べ、“nothingness”が議論の中心とどう関係しているかがいささか不明瞭であり、特に第四章はそれ自体の論述は比類なきもので学術的貢献度が高いが、博士論文全体の文脈においてはやや場違いな印象を免れない。

本論文において提示される“nothingness”の概念は、田ノ口君の意図と射程を超えて、19世紀アメリカ文学を考える重要な手がかりとして機能する可能性を示すだろう。序論でエマソンについての簡潔な言及があるが、他にもたとえばエマソンから多大な影響を受けたエミリー・ディキンソンの詩にも、有名な“I’m Nobody! Who are you?”のように、「何者かである(Somebody) こと」を否定的に提示したうえで、「何者でもない(Nobody) こと」を肯定する身ぶりを示すものがあり、本論文の nothingness の概念と共鳴しよう。本論文では“nothingness”が T・S・エリオットを彷彿とさせる“self-effacement”(56) と結びつけられているが、個人主義全盛のロマンティシズム時代にあって、自己を滅却するというモダニズム思想がエマソン、メルヴィル、ディキンソンに共通してみられるのは興味深く、その意味でも nothingness という概念は、19世紀アメリカ文学全体に適用できるのではあるまいか。

上記のとおり、本論文は独創的な概念を提示し、それをすぐれた精読によって支え、将来的な19世紀アメリカ文学研究の可能性をも指し示すことに成功しているが、もちろん問題がないわけではない。

第一に、“nothingness”という本論文の鍵概念の定義が全体を通じて不明瞭である。序章において、“nothingness”は“pessimism”(6)、“silence”(9)、“passivity”(11)、“impersonality”(23)など、幅広く否定的なものと結びつけられており、明確な概念の定義がなされていない。さらには、章ごとに“nothingness”の定義が異なるうえ、その説明が各章で明確に行われなかったために、筆者が具体的に何を指して“nothingness”と呼んでいるのか、読者は推測しながら読み進めることになる。また“nothingness”と関連して“nihilism”という言葉が頻繁に使用しながら、なぜニーチェを援用しないのか。というのも、メルヴィルが愛読したショーペンハウアーを経由し、ニーチェが「積極的ニヒリズム」として提示した概念は、「否定性を肯定性としてとらえ直す」という本論文の逆説的発想と重なり合うところが大きいからだ。それは寺田建比古が『神の沈黙』(1968)で示したメルヴィル観の批判的発展を導くはずである。

第二に、本論文には、“nothingness”という概念が作品を追うごとにどう変化していったのか、あるいは変化しなかったのか、という作家論的あるいは通時的な視点が不足している。上に挙げた定義の問題と連動するが、章ごと(つまり作品ごと)に“nothingness”に関する議論が完結してしまっており、なぜ“nothingness”という概念がメルヴィル作品で重要であり続け、なぜその概念をたどることで、彼の建国時のアメリカ的理想に対する姿勢を浮き彫りにすることができるのか、といった点は十分に論じられてはいない。この概念を、単一の作品に限定せず作家キャリア全体の軌跡に重ね合わせることができれば、より包括的なメルヴィル論を提示できたはずだ。

第三に、本論文が現行のメルヴィル研究、あるいはアメリカ文学研究にどういった貢献(contribution)と介入(intervention)を試みようとしているのかが、いまひとつ明確ではない。援用されている先行研究の多くが20年以上前の古い文献であるばかりか、それらを具体的にどう乗り越えるかといった戦略がうかがわれないのである。一例をあげれば、Lauren Berlantの*The Anatomy of National Fantasy*(1991)では、ホーソンが独立戦争を強く意識しつつ、南部へのある種のシンパシーを抱いていた可能性が議論されるばかりか、

citizenship という概念がきちんと定義されないままに国家としてスタートしてしまったアメリカの問題点が明確に指摘されており、田ノ口論文と共鳴する議論がなされているだけに、同書への言及がないのは残念だ。先行研究との差異を明確にしないことで、本論文が有する本来のインパクトを十分に表現できていないのは惜まれる。

ただ、上記の問題点はどれも今後の方法論的改善のための指摘であり、本論文の独創性をいささかも減ずるものではなく、むしろその潜在的な可能性の証左となろう。よって審査団一同は、ここに田ノ口正悟君の論文を博士(文学)の学位授与にふさわしいものと判断する。

(2019年10月4日)